

館山支部だより Vol.123

＜支部連絡窓口＞
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表) 川 村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
Tel. 0470-22-0230



《真夏の象徴・ヒマワリ》

太陽を追って花の向きを変えることから
向日葵(和名)とか。英名はサンフラワー
＜拙宅の庭先から＞

このところ蝉の鳴き声を聞かないですね。20年ほど前館山に住みついた頃、裏山から響き渡る蝉のライブには閉口させられたものです。作物の天敵アナグマに代わって最近は外来種のアライグマやアライグマが猛威を振るっているようです。開発やペット類の放棄などの影響でしょうか。昨今の気象予報で盛んに”危険な暑さ”とか”災害級の線状降水帯”が強調されております。ついに地球温暖化から”沸騰化”の時代に突入することになったのでしょうか。このような自然界のもろもろの変異、それら諸悪？の根源は人類・人間様にあると言われます。その意味をもう一度噛みしめてみることも大切(必須)かと思うのです。 <川村 記>

支部の活動概要

《6・7月の活動実績》

6. 2(日) 館砲校戦没者慰霊祭(櫻街道主催、館砲校跡)
7.16(土) 県隊友会前期支部長会議(千葉市民会館)
⇒ 8月10日(土)に変更
7.27(土) 7月支部役員会(コミセン)

《8・9月の活動予定》

- 8.10(土) 県隊友会前期支部長会議
9. 28(土) 9月支部役員会(コミセン)

「終戦80周年」を来年に控えて

間もなく終戦79周年がやってきます。例年各地で戦争・平和をテーマとした行事や集会等が催されております。そして来年には「終戦80周年」という大きな節目を迎えようとしております。

隊友会が重視する事業活動の一つとして「自衛隊諸業務に対する協力支援」があげられますが、かつては「(国民・市民一般に対する)防衛意識の普及高揚」として強調されておりました。これは「防衛・自衛隊に対する中正・公正な理解・認識を深め・高める」という表現に置き換えることができると考えます。

館山支部として、かつて何回か地元紙等への投稿や市民講座(「ふるさと講座」)等を通じて、以上掲げた隊友会の事業活動の重視目標の達成に向けた努力をしてきた積りですが、諸般の事情もありこのところ極めて低調に終わっていることは否めません。来年の終戦80周年を控え、今年度はその準備段階として市民等へのアピール(投稿等)、来年度は1～2回の市民講座の実施に向けて努力する所存です。

<支部長>

支部告知コーナー

〇千葉県隊友会「災害情報協力員制度」について

巷間ではSNS(YouTube)で動画とともに素早く流される災害情報等が話題になっておりますが、一方では無責任な「偽情報、ウソの救援要請など」が社会問題になっております。 県隊友会が千葉県自衛隊災害隊長(空挺団長)との間で取り交わした表記の協定は、災害発生時に協定に基づく事項について具体的な状況を報告することが求められております。

館山支部は現在5名の会員(理事役)が協力員として登録され、まだ”実動”が無いことは喜ばしいことですが、災害発生時には”タイムリーな情報提供”をモットーに役に就いております。

〇「館山支部だより」への投稿歓迎

支部(役員会)と会員を結ぶ唯一のコミュニケーション・意思疎通の手段として隔月配付しておりますが、一方通行に終わらぬよう会員諸兄からの投稿を歓迎します。隊友会・支部の活動に限らず、提案、要望、体験記、あるいは苦情等々、形式にこだわることなく自由に(時期、期限にこだわることなく)遠慮なくご投稿を！ <支部事務局>



《頑丈な謎の構築物》

かつての館砲校平砂浦演習場跡に残されているコンクリート構造の一見防空壕を思わせる構築物。この用途については諸説紛紛としているが、対化兵戦(防毒戦)教育の実物教材と考えるのが順当であろう(本文参照)。 <筆者注>

随 想「吾妻鑑に垣間(かいま)見る鎌倉幕府」

NHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」の中で尼將軍北条政子が御家人に対して行った「右將軍頼朝公のご恩は、山よりも高く海よりも深し」で始まる大演説は、てっきり脚本家の脚色かと思っていたのですが、歴史書「吾妻鑑」から引用したもので、またドラマでは政子が演説しておりますが、御家人の安達景盛が代読したもののようです。この演説が、第3代將軍実朝が暗殺されて源氏が途絶え、幕府の混乱に乗じて後鳥羽上皇が執権北条義時追討の院宣を発したことから、動揺し尻込みする御家人たちを鼓舞し、結集させるために行ったというので、結果は幕府側の圧倒的な勝利に終わっております(「承久の乱」)。

以前この場で紹介したことがあります。幼児期を鎌倉で過ごしたこともあり鎌倉幕府には特に関心が深く、そして「吾妻鑑」が日本の武家政権の“最初の公的な歴史書”ということもあり、一度紐解いてみたいという野心に駆られておりました。とは申せ全52巻に及ぶ原書(原本)は国の重要文化財として国立公文書館に厳重に保管されており、いくつか作られたと言われる写本も難解な漢文体でとても近寄り難く、最近、「現代語訳解説書」みたいなものを見付け拾い読みしてみました。

頼朝の挙兵から鎌倉幕府の創設、征夷大將軍任官など

朝廷が当時権勢を欲しいままにしていた平家追討の宣旨を出したことで、関東・東国の源氏が一齐に蜂起し、伊豆で幽閉中の身の頼朝が挙兵した話は良く知られております。しかしながら石橋山合戦で大敗を喫し、わずかな手勢を率いて房総半島に逃れ、再起を期した臥薪嘗胆の故事など、房総各地には”伝説”的な話が沢山残されております。洲崎神社近くの「頼朝上陸の地」の碑もおそらく吾妻鑑に起源のあるもののひとつではないかと思われます。

それにしても石橋山の敗北からまたたく間に勢力を盛り返して関東を席捲し、源平合戦・壇ノ浦で平家を滅亡に迫込み、鎌倉に日本最初の武家政権を築き上げ、最後は征夷大將軍にまで登り詰めるなど、戦略家の頼朝と言われるようにナミの武将ではないですね。かたや平家討伐の最大の武勲者で戦術家の義経との間になぜ確執が生まれ、最後は東北に追いやられる結果になったのか、謎めいた話も多いですね。

「吾妻鑑」の史的価値・意義など

「吾妻鑑」は、鎌倉幕府の初代將軍頼朝から最後の第6代將軍宗尊親王までの將軍記という構成になっているということで、編纂者は幕府中枢の御家人(複数)と見られているようです。ただ吾妻鑑が編纂された時期は、鎌倉時代の後期(むしろ末期に近い)というのが有力で、それ以前の事柄については幕府事務官僚の日記・筆録や御家人等から提出された公文記録、伝承等をもとに編纂されているようです。要するに吾妻鑑は公文書であり「官製史」なのです。必然的にその時の政権により、編纂者の主観や編集姿勢、さらに”曲筆”があることについては、多くの国文学者や歴史研究家などが指摘しているようです。

とはいえ、日本最初の武家政権に関する公的な記録・歴史文献であることに変わりなくそこに大きな意義があると思います。まだ解説書のごく一部を拾い読みしただけのことで、決して歴史の真実の追究といった大袈裟なことでもありませんが、調べることに歴史のロマンみたいなものを感じるのです。今後とももう少し欲を出して続けてみたいと思っています。 <匿名、海>

館山砲術学校演習場跡地に燻(くすぶ)る「毒ガスの伝説」

最近、知人を通じてかつての館山砲術学校(「館砲校」)の平砂浦演習場跡地の一部にあったとされる「毒ガス実験場跡」のことにについて質問された。実験場跡は有刺鉄線で囲われた2～3百坪の土地の中にあり、長い間「売地」の看板が建てられたままであったが、数年前に買い手がついたようで風評被害もようやく下火というところか。肝心の「毒ガス実験場跡」の真偽については、以下の記述からおおよそ類推できよう。

海軍と化学兵器、館山砲術学校(「館砲校」)における「化兵教育」

S5年に海軍技術研究所(平塚)に化学実験部が新設され、毒ガスの研究開発に着手した。S18年には相模海軍工廠が建設され防毒面などの防毒器材の研究開発とともに本格的な生産が開始された。一方で小規模ながら毒ガス弾などの攻撃用兵器の製造に手がけていたことも確かである。しかしながらS20年作戦部に新編された「化兵戦部」の内部資料には、「(本土決戦においては)毒ガス攻撃に対する防護に徹する」旨の作戦指導指針を読み取ることができる。またS18年に入り館砲校に「化兵科」が新設されたが、改定された教育綱領(カリキュラムみたいなもの)の中にも「化学兵器の研究開発や毒ガスの実験」に関する記述は一行も載ってない。S20年初めに館砲校が編纂し、部隊にも配付した「対化兵戦教範(草案)」の冒頭(序文)には、「毒ガスの防護」が教育の基本理念として掲げられている。

平砂浦演習場跡地に絡むたわいない伝説

掲載した写真は、かつての館砲校の平砂浦演習場の一部に今なお残っているコンクリ製の構築物である。一見して20人ほど収容できそうな防空壕であるが、広大な演習場に一箇所だけでは用をなさない。また「毒ガス実験棟」と言う説が幅を利かせているが、二重構造の鉄製扉(終戦後何者かに持ち去られたと思われる)や天井換気装置の取付跡など、前述の「対化兵戦教範」の中で各部隊での建設が推奨されていた「集団防毒施設」と考えるのが当を得ているであろう。化兵科の課程教育や度々開講された「化兵戦講習」の“実物教材”として準備されたもの、と断定しても良いであろう。

またこんな話がある。終戦直後のこと、館砲校の化兵科を修業したという予備学生が、地方紙に「平砂浦演習場で行った細菌兵器の散布訓練」と題して匿名でスクープ？している。要約すると、「布良海岸で“大量の大腸菌”を充填した噴霧器を背中に背負い、ゴム製の防毒服、防毒マスクの完全装備？をした学生たちが、米軍が上陸する直前(をねらって)、駆け足で波打ち際に散布する実地訓練を度々行った」。序に「海軍軍令部から訓練を視察に来ていた細菌戦の権威と言われるK中佐がこわばった表情で見ている」とか。

まことしやかな話であるが、細菌には発症までの潜伏期間があることは小学生でも知っている。上陸用舟艇から波打ち際に降りた米兵がその場でバタバタ倒れてくれるのだろうか、むしろ苦境に陥るのは守備側の日本軍であり、地元の住民である。まことしやかな話であるが、分別の乏しい幼稚な話としか言いようがない。 <自称地域史探索マニア その46>